真・恋姫†萌将伝 ～群雄割拠再び？～

イルカ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
真・恋姫†萌将伝　～群雄割拠再び？～

【Ｎコード】
Ｎ９２８１Ｘ

【作者名】
イルカ

【あらすじ】
萌将伝の記憶を持った恋姫達が、原作開始前にタイムスリップ！！！
群雄割拠を乗り越え、大陸に平和を齎した恋姫達。二度目の荒廃した世界をどう生きるのか？
群雄割拠は再び起こるのか？
仲良くなった者達に刃を向ける事ができるのか？
そして、北郷一刀は…その内出ます。

序章、閉じた外史、生まれた外史

後漢王朝末期――
三国時代と呼ばれる群雄割拠の時代
それぞれの理想、野望、想いを胸に戦い抜き
世界に平和を齎した英傑達。
その傍には常に、管賂の予言通り、天の御遣い・北郷一刀がいた。

『荒廃せし世を導く者あり
その者、流星と共に現れ
世に平和を齎す。
即ち、天の御遣い也――。』

英傑の数だけ天の御遣いが遣わされ、その数だけ広がった世界。
ある者はこれをパラレルワールドと言い、ある者は外史と呼ぶ。
そして、この外史――

英傑達はそれぞれの外史で乱世に平和を齎した。
戦後処理政策として北郷一刀を御旗とした三国連合を発足。
『三国連合の御旗、天の御遣い・北郷一刀』
この事柄が世界に与えた影響が強過ぎ、北郷一刀を触媒として外史が引き寄せ合い、繋がり、混ざり、融合し、矯正され、やがてひとつの世界として、統一された。

『天の御遣い、一人の想いの為に力を振るう
一人の思い叶いし時、始まりは終わりへと至る』

この統一された世界も、他の外史と同じ様に、時が経てば消えゆく

定めであった。
しかし、外史の融合の結果、取り込んだ外史分だけ世界の寿命を伸ばした。
更には、融合していない外史までも、北郷一刀を触媒として吸収しはじめた。
が、遂にこの三国連合の世界も、寿命が尽き、終焉を迎える。
が、全ての消滅を逃れるかのように、吸収されかけた外史に英雄達の想いと記憶が混ざり、新たな外史として誕生した。

その外史の扉が、いま開かれる――。

1、それぞれの始まり（前書き）

それぞれのお話。
時系列はバラバラです。

1、それぞれの始まり

／冥琳

はぁ～、やっぱりこうなってしまうか。

「雪蓮、もうこの辺でいいだろう？」

「何言ってんの？これからが本番じゃない」

そう言って、美羽…袁術に向かって黒い笑いを浮かべる孫呉の王。

と言っても、今の身分は美羽の客将。

「美羽～？今度はね～前みたいな事はしたくないな～って、思ってるのよね～？」

「しぇ、雪蓮…わ、妾も、もう怖い思いはしたくないのじゃ」

政務室の隅でガタガタと震えている美羽。

「おい、雪蓮。この辺で止めておけ。泣いてるではないか」

七乃と抱き合いながら目に涙を溜めている。その目が一瞬、私を見て、

「わ、妾は、な、泣いてなぞおらぬぞ！」　と精一杯、虚勢を張る。

「ふ～ん…そっかそっか。前は泣いてたのに強くなったじゃない。それで、そんな美羽ちゃんはこれからどうしたいのかな～？」

前回の事を思い出したのか「ひっ」と息を飲む美羽と七乃。

「わ、妾は…妾は…そ、そうじゃ！妾はこれから七乃と一緒に、主様を探しに行くのじゃ！今決めたのじゃ！！だからこんな城はぬしにくれてやるのじゃ！！」

わっはっは、参ったか～！と、笑う美羽。

あっはっは、さっすが美羽！と、笑う雪蓮。

こんな脅しで手には入るぐらいなら、前回あれ程まで苦労する事はなかったのではないか。

二人の笑いが響く部屋で、そんな事を思った。

／白蓮

街に出ると懐かしい顔が揃っていた。

「伯珪様、おはようございます」

「お～、太守の嬢ちゃん、今日もいい天気でさ～ね」

一人一人に挨拶をして歩く。　昔懐かしい光景に、少し涙が滲んだのは内緒だ。

「たいしゅさま？ないてるの？どっか、いたいの？いたいいたいしてあげようか？」

……内緒だ。

って、こんなに小さな子に見られたんじゃ仕方ないな。

「あ～、もう大丈夫。目にゴミが入っただけなんだ。ありがとうな」

そう誤魔化して、少女の頭を撫でる。

「あらあら、太守様すみません。珪歌ちゃん、太守様にありがとうは？」

「んー？たいしゅさまありがとー」

首を傾げてから、そう言ってニカッと笑う少女。

なぜ私がまたここに居るのか。一体何があったのか。なんて私が考えたって分かる筈はない。だけど、ひとつだけ分かる事がある。

今度は、今度こそは絶対にこの幽州を守り抜く！

少女の笑顔を見て、決意を新たにした。

／蒲公英

「母上っ！！！」

おねーさまがそう言って、おば様に駆け寄った。

「こら、翠。いきなり抱き付いて来てどうしたと言うのだ」

そう言ったおば様の言葉もおねーさまには聞こえないのか、母上！母上！と泣きながら抱き付いている。
困った顔で蒲公英を見るおば様。
「何があったのか分からないけど…蒲公英も同じみたいね」
――こっちへいらっしゃい。
笑顔でそう言って、手招きをするおば様。だから蒲公英は、
「おば様…おばさまー…うわぁ～ん！…っ」
泣きながら抱き付いちゃって。
蒲公英にはお母様がいないけど、おば様がお母様みたいだから、
「おばさまー…おばさまー…おかーさまー……うわぁ～んっ――」
って、いつの間にか、おかー様おかー様って叫んじゃっててて、泣き疲れて、眠ったって。
後でおば様が笑いながら言ってた。

／真桜

凪が大変な事になっとる。
もう三日も魂が抜けたような感じや。まー気持ちは分からんでもないけど。
「なー沙和、このままやったら、凪が使いもんにならなくなるんとちゃうか？」
「うーん…沙和もそう思うのー」
「せやけどなー…隊長、今何処におるんか分からんしなー」
三日前、気が付いたら昔の家で寝とった。
今までの事が夢だったんかなー思っとったら「凪ちゃんが大変なのー」と沙和が駆け込んで来てな。そのまま連凪の家まで連れて行かれたんや。
凪の家に着いたら、凪の奴「隊長…隊長…」と連呼しながらフラフラと彷徨ってたんや。

こりゃーあかんと思って色々話したんやけどな？耳から耳へと抜けとった。
心ここに在らずや。
「隊長、華琳様のとこに居るんやろか？」
と、沙和に聞く。
「そんなの沙和にはわからないの。でもこのままここにいても隊長にはきっと沙和達を探せないと思うの。だから、沙和達が見つけないとダメだと思うの」
おぉー？こりゃ意外や。沙和の奴もちゃんと考えとるやん。
まー、隊長の事だからやろうけどな。
「せやな。待っとったっていつになるのか分からんのやし。なら、うちらが探さなあかんな」
「そうなのそうなの！それに、うまくいけば隊長の事独占できるかもなのー」
「おおぉ！？それは盲点やった！！でかした沙和！ほんま冴えとるやんか！」
思わず沙和を抱き締めようとした時、
「隊長を独占だとぉー！！！！！！！！」
凪が突然雄叫びを上げた。
「沙和！真桜！そうと決まればこうしてはおれん！すぐに隊長を探しに行くぞ！！！！」
「凄いの凪ちゃん！復活したのなのー！」
「めちゃくちゃ元気やないか…さすがうちらの隊長や」
沙和と二人で、なんや騒いどる凪を見て思わずつぶやいた。
こうしてうちらの旅は始まったんや。

1、それぞれの始まり（後書き）

次回も、短めの個人パートになります。

文章の始めに一文字分空けるか空けないか迷ってます。

アドバイス有りましたらお願いします。

2、それぞれの始まり？（前書き）

まだ個人パートです。
短い話ばかりです。

2、それぞれの始まり？

／朱里

「う～…ご主人様～…何処ですか～？」

雛里ちゃん、今日も夢でご主人様を探しているのかな？

水鏡先生の塾を出てから今日で三日目。

寮の寝台で起きた時は驚いたけど、雛里ちゃんと相談して桃香様やご主人様を探そうってなって。雛里ちゃんにも三国連合の記憶があったから、多分、他のみんなも記憶を持っているだろうって。でも、幽州までは遠いから、紫苑さんか月ちゃんのところに行って、記憶の事を確かめようってなって。でも、紫苑さんのところに行ったら、幽州まで遠いから、やっぱり月ちゃんのところに行こうってなって。でもでも、洛陽は怖いかもって雛里ちゃんが言うから、やっぱり直接幽州に行って白蓮さんに会おうって決まって。

それから旅に出たのはいいんだけど、毎晩雛里ちゃんがご主人様って泣いて。

私は親友だけどお姉さんみたいなものだし、私がしっかりしないと雛里ちゃんも心細いと思うから。

だから、はやくご主人様に会いたいです。

／雛里

「う～…ご主人様～…何処にいますか～？」

朱里ちゃん、今日も夢でご主人様を探してるのかな？

水鏡先生の塾を出て今日で四日目。

寮の寝台で起きた時は驚いて泣いちゃったけど、朱里ちゃんと相談してご主人様と桃香様を探そうって。朱里ちゃんにも三国連合の記憶があったから、多分、他のみんなも記憶を持っていると思うって。

でも、幽州までは遠いよ？って言ったら、紫苑さんか月ちゃんのところに行って、記憶の事確かめようって決まって。でも、紫苑さんのところに行ったら幽州まで遠いよねってなって、やっぱり月ちゃんのところに行こうって決まったけど、洛陽はちょっと怖いかもって言ったら、やっぱり幽州に直接行って白蓮さんに会おうって決まって。

それから旅に出たのはいいんだけど、朱里ちゃんが毎晩ご主人様って泣いて。

親友の朱里ちゃんにはいつも助けてもらってるから、今度は私がしっかりしなくちゃって思ったんだけど。

だけど、ご主人様…はやく会いたいよぉ。

／桃香

起きたら知らない街の宿屋さんで眠っちゃってたみたい。

何でこんな所にいるんだろう？みんなはどうしちゃったのかな？

そう思って外に出てみたら…。

昔はよくこんな光景見てたなぁ～。

盗賊に荒らされた後の村。

お金が無かったから、黙って泊まらせてもらっちゃってたなぁ～。

でも、朝起きたら誰もいなくって。

その代わり色んな所に死体があって。

前の日からずっと、穴を掘って埋めて。

疲れて動けなくなったら宿屋さんで眠って。

起きたらまた穴を掘って、死体を埋めて。

涙を流しながら、どうしてみんなで笑っていられないのだろう？って穴を掘って。

どうして私に力が無いんだろう？って、涙が止まらないまま死体を埋めて。

小さな子供を埋める時には「ごめんなさい」って涙で前が見えなくなって。
――そう、こんなふうに。
「あれ？何で、涙がでてるのかな？」
「どうして私はまた、こうやって穴を、掘って、いるのかな？」
「平和に、なったの…に、なんで、みんな死んじゃっ…てるの？」
「涙が…止まらないよ…でも、穴掘って、埋めて上げないと…」
「なんで？…なにもできなくて……ごめんなさい…ごめんなさい」
「愛紗ちゃん…鈴々ちゃん…ご主人様…みんなどこにいるの……」
ずっとずっと、穴を掘って、死体を埋めて――。

／流琉
兄様、お元気ですか？
今私は、季衣と二人で旅をしています。
五日前に起きた時、私は昔住んでいた村の私の家にいました。楽しくて幸せな夢を見ていたんだな～って思いました。
兄様は知ってましたか？
そういう夢って、覚めた時に凄く切なくなるんだって。
華琳様や兄様がいて、秋蘭様や春蘭様、風さんや稟さん…凪さん達…。
皆さんで騒いで遊んで戦って。
兄様に新しい料理を教えてもらって。
そんな毎日をもう過ごせないのかと思ったら、涙がでちゃって――。
「流琉！にーちゃんたちのところに行こう！！」
そんな時に、季衣がそう言いながら部屋まで入って来ました。疑問に思った事を季衣に話しても「難しい事はわかんないから、とにかく行くよー！」って。
ほんとに季衣ってば変わらないなぁ～って思いながら、私は旅支度を始めました。

季衣ってば、一回決めたら強引にでもそうしようとするから。そうして、二人の旅が始まりました。
って言っても、華琳様の居る陳留までですけど。

あっ、そうだ！
昨日、美羽ちゃんと七乃さんに会いました。
こっちに来て初めて知った人に会えたから、最初はちょっと不安でした。
「おー？華琳のところのちびっ子二人なのじゃー」
って、美羽ちゃんが言ってきたから安心しました。
美羽ちゃんと季衣が「お前の方がちびっ子だぞー」「なんじゃとー！？」って、騒いでる横で、七乃さんと話をしました。
なんでも、兄様を探すために雪蓮さんに地位を譲ってきたんだそうです。
確かにお二人とも兄様に懐いていましたけど、そこまでするなんて凄いと思いました。
私達はやっぱり魏の武将だから。
華琳様の親衛隊を辞めるなんて考えられません。
私達は華琳様のところへ向かうから、美羽ちゃん達の方が先に兄様に会うのかな？
そう思ったら、ちょっとだけ胸がチクッとしたけど、またみんなで騒げればいいかな？って、思う事にしました。
もう、華琳様のいる陳留が見えてきましたので、この辺で失礼しますね。

2、それぞれの始まり？（後書き）

流琉の話し方が掴めない…。

3、それぞれの始まり？（前書き）

徐々に話が進む恋姫もいますが、まだ短い話ばかりです。

3、それぞれの始まり？

／焔耶

桃香様桃香様桃香様桃香様
桃香様桃香様桃香様桃香様
桃香様。

あー！！！！桃香様！！！

桃香様桃香様桃香様桃香様！

一体何処に！！！

桃香様桃香様桃香様桃香様
桃香様桃香様桃香様桃香様
桃香様桃香様桃香様——。

最近、周りの奴らがワタシを避けてる。が、関係無い。

桃香様桃香様桃香様桃香様
桃香様桃香様桃香様——。

今日、解雇された。
そうだ！幽州へ行こう！

／愛紗

その姿を見た時、見つけ出した喜びより、ここに辿り着くまで考

えていた事が的中してしまったのか？という不安の方が強まった。

――と、桃香様？一体それは…っ！？

胸を槍で貫かれた様な衝撃。

「桃香様っ！！！！！」

叫ぶ。と、同時に駆け出す。

「おねーちゃん！！！」

鈴々も同じ思いなのだろう。

並んで走る。

――まさか！そんな！

嫌な予感が頭から背中を伝い、身体が震える。そんな物、知った事ではない！と、走る。

傍まで駆け寄った時に桃香様がやっと、私と鈴々に気付かれた。

漠然とした予感はあった。

優し過ぎる桃香様だから。

他人の為にこそ、涙を流すようなお人だから――。

「あっ！愛紗ちゃん！鈴々ちゃん！」

だから、もし、折角築かれた平和な世界が、皆が笑って居られた世界が…夢の中の出来事だったら――。

「お姉ちゃん……」

「桃香様…」

「皆に紹介しなくちゃね！」

桃香様は、どう思うのだろう？もう一度、平和な世界を築くために立ち上がって下さるのか。それとも――。

「早く他のみんなにも紹介したいな～。みんな仲良くなってくれるかなぁ～？」

それとも…現実を受け入れられず、壊れてしまわれるかもしれない――。

桃香様は笑顔で話しながら、綺麗に並べられ、座らされた子供達の死体を優しく撫でる。

「――くっ！だから…だから早く、桃香様と合流しなければ！そう思って走って来たというのに！」

思わず叫んだ。

「璃々ちゃんや美以ちゃんも、お友達が沢山増えて喜んでくれるかなぁ～？」

私は、震えて力の出ない身体を動かし、それでも何とか優しく桃香様を抱き締めた。

泣きながら私達にしがみつく鈴々。

そんな二人を見て、私は世界を呪った。

／亞莎

今、私達は全員、雪蓮様の緊急召集により謁見の間に来ています。

「皆、揃ったようだな。ではこれより会議を始める。先ずは現状についてだ」

冥琳様の司会で会議が始まりました。でも、美羽ちゃんのお城で勝手に会議をして大丈夫なのでしょうか？

「皆ももう知っているだろうが、我々はどうやら過去に飛ばされたようだ」

そうです。今朝起きてから明命や祭さん、思春さんと確認をしました。吃驚しました。

一刀様もこんな風に驚いたのでしょうか？

「一応確認しておくが、未来から来ていない者がいたら手を挙げてくれ」

みんな手を挙げません。

「いないな。わかった。では――」

やっぱり美羽ちゃん達も未来から来たのでしょうか？だからこの場所を貸してくれたのでしょうか？

「――現状の確認は以上。次は雪蓮から今後の方針に付いて話してもらう」

そう言って後ろへ下がる冥琳様と、椅子から立ち上がり前へ出る

雪蓮様。

「さっき、美羽からこの城を譲ってもらったから」

笑顔を浮かべて衝撃的な発言をしました。

一瞬、時間が止まったかと思いました。

静寂が時を支配するってこういう場面を言うんですね。

「さっき、美羽からこのお城を譲ってもらったから」

時を動かしたのはやっぱり雪蓮様の一言でした。

「あ～策殿、二回言わなくてもちゃんと聞こえてたわい」

「そうなの？それならそうと反応くらいしてよねー」

ぶーっと、顔を膨らます雪蓮様。

「お、お姉様が急に変なことを言うからじゃないですか」

「じゃーどう言えばいいのよー」

「そう言われると――」

ガヤガヤと騒がしくなる謁見の間。祭さんと蓮華様が雪蓮様に詰め寄り、冥琳様は苦笑しながらそれを眺めてます。

「あ、あの！！！」

突然上がった大声に場が鎮まり、皆さん声の上がった方を見ます。

そこにいるのは明命。

「み、明命？」

「明命ちゃ～ん？」

「どうしたというのじゃ」

普段の穏やかな顔ではなく、キッとした目で雪蓮様を見つめている明命。

何とも言えない迫力が、その…ちょっと怖いです。

「はっ！？あぅ…その…すいません。突然大声を上げてしまって」

我に返った様に顔を赤くしながら俯き、謝る明命。

一体どうしたのでしょう？

「明命。この後私の所に来なさい。冥琳もいいわね」

「はい…」

「あぁ、分かっている」

頷き合う雪蓮様と冥琳様。

「では最後に…残念だけど、美羽には死んでもらったから」

まさか…？

ザワッとなる広間の中、明命がまた、キッと顔を上げて、

「雪れ――」

「冗談よ！！！！！」

「うむ。美羽と七乃は北郷を探しに行くと言って、我らに城を明け渡した。だから、心配する事はない。以上だ。解散」

明命が雪蓮様に呼び掛けようとしたのを、雪蓮様が遮り、冥琳様がまくし立てる様に言葉を続けた。
そして、いつの間にかに場が解散になっていた。
明命を連れて出て行く雪蓮様と冥琳様。
その場に残った私達は、暫くの間、訳の分からないまま呆然と立っているだけでした。

3、それぞれの始まり？（後書き）

桃香様、ごめんなさい。
愛紗、鈴々と一緒なら違うんでしょうが…。
独自解釈であります。

メールで書いてますが、閲覧すると一段落目が半角だったり全角だったり。
編集でなかなか揃わなかったので、今回は左詰めです。
読みにくければ教えて下さい。

4、華琳の場合（前書き）

今回は華琳様です。

4、華琳の場合

／華琳

「知らない天井だわ…」

それもそうね。私達は昨日、南陽に泊まったのだから。

そう思ったが、寝る前と雰囲気が違う違和感。それに、何処か懐かしく見覚えのある天井。

そこで思い当たる。

あの群雄割拠の時代、それも最初の居城。陳留の私の部屋ではないかと。それに…少しだけ身体が縮んだ気がする。

もしかして…。

「あれが全部夢だったなんて事はないでしょうね？」

そうつぶやき、急ぎ着替えて部屋を出る。

「やっぱり…陳留のお城だわね」

廊下に出てここが陳留だという事を確信した。

では、夢？いや、もしかしたら…。考えながら、政務室へと向かう。

「華琳様！」

「華琳様！」

私を見つけた秋蘭と春蘭が駆けてくる。

「秋蘭、春蘭、二人ともおはよう。その様子だと、この事態に気が付いているようね」

「はい！」

「はい――」

と、同時に答える二人。

「ただし、推測でしかありませんが」

と続ける秋蘭。

「そうね。でも、きっとそうなんでしょうね」

二人を見て確信した推測――私達は時間を遡ったという事。

「と、なれば、皆がこの城に来るのを待ちますか？」

「それは…どうかしら？皆が来るとは限らないわよ？例えば霞は月達と一緒にいるから、もう我が陣営には来ないでしょう」

それに――と、言葉を続けようとしたが、

「なっ！？霞が来ないとはどういう事ですか！？華琳様！」

春蘭が声を荒げて聞いてきた。

「霞は洛陽にいるはずだわ。あの十常侍を相手にしているのだから、月達を残しては来れないでしょう」

「十常侍？それは……誰ですか？」

「ま、春蘭だもの、覚えているわけ無いわよね。秋蘭、説明お願い」

そう言って、秋蘭に顔を向けると、こっちはこっちで「姉者、かわいいな～…」と、春蘭を眺めて惚けている。

ほんと、姉妹揃って私を楽しませてくれる。思わず笑みを浮かべそうになるが、

「秋蘭！春蘭に説明をしてあげて頂戴」

と、怒鳴り気味に声を掛け、苦笑しながら政務室に入った。

――懐かしい場所。

入った瞬間、懐かしさで足が止まった。

――ここから全てが始まったのよね。

少しだけ昔を想い、懐かしい椅子へと向かう。

「で、春蘭。わかったの？」

椅子に座り、春蘭の顔を見て聞く。

「はい！華琳様！十常侍についてはわかりました！ですが…華琳様？」

「まだ分からない事があるようね――」

申し訳無さそうに私の顔を覗く春蘭に、「いいわ。続けなさい」と先を促す。

「そんなに悪い奴なら、華琳様が辞めさせればよろしいのではないかと――」

「ちょっ――」

「あ、姉者…」

一瞬、頭が真っ白になって絶句。多分、秋蘭もだろう。

その間にも春蘭は「それにしても北郷の奴も不甲斐ない！」とか「桂花も文官の長なら…」とか「霞も霞だ、そんな奴等首をハネれば…何なら私が――」

「待ちなさい！！春蘭！」

怒鳴り声で興奮から覚めた春蘭がハッとし、謝る。

それより――。

「春蘭。今、私達が何故この城にいるのか、理由が分かっているのなら言ってみなさい」

「はい！華琳様！えーと、何故この城にいるかと言うとですね。起きたらここにいたからです！」

胸を張って答える春蘭。

理由になって無いわよそれは。

「まぁいいわ。それでは、何故この城で眠っていたのかしら？私

達は昨日、南陽で眠ったはずよね？」

「それは…酔って眠った私達を誰かが運んだからではありませんか？」

「どうしてこんな所に運ぶのよ」

「それは…部屋が足りなかった…とか？」

「はぁ～…」

思わず溜息が出た。

「もういいわ春蘭。秋蘭、後をお願い」

そう言って秋蘭の方を見れば――。

「姉者はかわいいな～」

そうつぶやいていた。

またなのね。

「…もういいわ。秋蘭、後で教えておきなさい。それと、どういった経緯でこんな事になったのかは、皆が集まってから考えるとして。先ずは――」

一度そこで話を止め、二人の顔を見て――笑顔で言う。

「着替えてらっしゃい」

起きて慌てて来たのだろう。ずっと寝間着のままの二人は、指摘され、お互いの服装を見てから、

「「も、申し訳ありません！」」

と、慌てて部屋を出て行く。

流石に姉妹ね。咄嗟の状況だと同じ言葉が出るなんて。笑いながら二人を見送る。そして思う。

――秋蘭も可愛いところがあるじゃない。

冷静なつもりが寝間着だったなんて、今頃は――。

「秋蘭の顔は真っ赤になってるかしらね？」

もう一度「くくくっ」と笑い、今後の事を考える。

「二度目の覇道。いや、今度は王道を目指すのも悪くないわね」

一度叶った覇道。そんな物にもう興味はなかった。それはそうと――。

「あの馬鹿は何処にいるのよ…」

政務室の窓から外を眺める。

あの頃よりも美しい青空に白い雲が浮かんでいた。

4、華琳の場合（後書き）

華琳は向上心の塊ですからね。覇道の達成にはもう満足は得られないかと思いまして。

月末年末に向け忙しくなるので、更新遅れると思います。

すみませんが、ご理解の程、宜しくお願いします。

5、南皮の二人（前書き）

人が多すぎて中々話が進みません。
今回は名門袁家の二人。
いや三人（？）です。

5、南皮の二人

／斗詩

「いいですか皆さん。必ず捕まえて下さい。」

「はい。顔良様！」

私は今、袁紹様の命令で重要指名手配犯を追っている所です。なんでも、我が城の機密を盗んだと言うことですが…。

「そんな事ないと思うんだけどなぁ～…だって――」

そうつぶやいて、文ちゃんに確認する。

「ねー文ちゃん、うちのお城に機密事項になるような物ってあった？」

「ん～…麗羽様の年齢ぐらいじゃないか～」

「もぉ～。確かに姫様には口止めされてるけど、いくらなんでもここまではしないよ～」

なにせ兵隊さん達を総動員しての捕り物だから。

でも、そうは言うけど麗羽様の事だからなぁ。ほんとにやりそうだし…。

特にご主人様にはバラさないようにって言われてる。それくらい、気にしなくてもいいと思うんだけどなぁ。

「きゃっ！？」

考え事をしている私の胸を、突然、ムニュウと鷲掴みにされた。

「ま～、アタイは斗詩のすりーさいずが無事ならどうだっていいんだけどな。エへへ」

背後から私の胸を掴んで、そんな事を言う文ちゃん。

「文ちゃん！ほんっとにもぅ…真面目にやらないと怒るからねっ！」

「分かった、分かったから。でもその前にメシにしようぜ。確か、この辺に――」

そう言って文ちゃんは隣に並び、キョロキョロとする。

何処にいてもどんな時でも、文ちゃんは変わらないな～。

少し呆れてそう思うけど、なんか嬉しい。私ひとりだったら途方に暮れてたと思うから。

それにしても、なんでこんな状況になっちゃったんだろ？

今朝、気が付いたら南皮のお城にいた。それも群雄割拠が始まる前、袁紹様がまだここの太守でいた時。

文ちゃんと私は、すぐに袁紹様に呼び出されて、状況を確認した。

私達三人がこうなったのなら、他の人達も同じなのかな？

それに、ご主人様はどうしたんだろう？やっぱりこっちにも降りてくるのかな？

文ちゃんも麗羽様も全然気にしてないから、周りの状況が分からないし――。

そんな事を考えている時、兵隊さんが一人報告に来た。

「顔良様！例の手配犯ですが、それらしい人物をこの周辺で見たという証言が十数件上がって来ました」
「本当ですか！？無視できない数ですね。隊員五名は私達と来て下さい。残りを半分に分け、一隊をこの辺の建物を重点的に調べて下さい。残り半数はここから外へ向かって調べ、証言が得られる範囲を特定して下さい。お願いしますね」

「はっ！畏まりました」

指示を出し、手配犯が潜伏できそうな場所を探す。

「文ちゃんも、ちゃんと探してるよね？」
「ちゃんと探してるって」

そう言いながら、いつにも増して真剣な顔をする文ちゃん。でも…。

「正直不安だなぁ」

そうつぶやいた時、

「分かった！多分あそこだ！行くよ斗詩！」

文ちゃんが私の手を取り、走り出しました。潜伏場所に心当たり在るのかな。

『南華楼酒家』

「やっぱりそうだよねー。文ちゃんだもんねー」

そんな気はしてたんだ。でも、あんなに真剣な顔してたから、期待しちゃったって仕方ないよ…。

「何ぶつぶつ言ってんだ斗詩？それよりここ！前の世界じゃ見つけてすぐに、親父っさんが黄巾党に入って潰れたんだよ！でも、美味かったからな～。斗詩を誘って来たかったんだよ！いやー。願いが叶うなんてアタイってば付いてる～」

そう言って私を連れて中に入る文ちゃんに、私は何も言えませんでした。

「あ、兵隊さん達はこの辺を見張ってて下さい」

猫耳帽子の手配犯捜索は、兵隊さんの働きに期待するしかないかな…。

／猫耳帽子の手配犯（桂花）

「なんでこうなるのよ！」

「ごめんね、桂花ちゃん。でも、袁紹様の命令だから」

「でもさ～猫耳…お前、何を盗んだんだ？」

「はぁ？私がこんなところから何かを盗むなんて、あるわけないでしょ！」

「ですよねー。でもごめんなさい。これも仕事だから」

そう言って、顔良と文醜はここから出て行った。
一人残され不安が募る。
呆然としながらも軍師の頭を回転させ、原因を突き止めようと記憶をたどる。

起きたら南皮の役人宿舎にいた。混乱しながらも、私が袁紹に仕えていた頃の部屋だと理解する。
そこからは華琳様の元へ向かうため、まず上司に離職届けを出し、部屋の整理をして宿舎を出た。
南皮から陳留までは船で川を遡った方が早いから、湊へ向かう。
途中、お腹が空いたので評判の良かった『南華楼酒家』で、ちょっと遅いお昼を食べる事にした。文官の安月給では少し高い場所で、中々行けなかったから丁度良かった。

けれど、やっぱり流琉の料理とは雲泥の差。
それに、流通や災害対策、農業・漁業などが充実し始めたあの時代には勝てる訳も無かった。不本意だけれど、北郷の作った料理の方が何倍も美味しかった。

だからと言う訳ではないけれど、早く華琳様の所へ向かおうと食事を中断して会計へ。

で、ばったりと顔良と文醜に出会い、いつの間にかに捕獲されていた。

「やっぱり私は何もしてないじゃない！！何で私が牢屋なんかに入れられているのよ！！」

牢屋の格子を両手で掴み、大声で叫んだ。
牢屋に響く私の声が、この先の未来を暗示しているかの様に、虚しく消えて行った――。

5、南皮の二人（後書き）

未出の恋姫を消化させつつ、既出の恋姫の話を進めていきたいと思います。
時系列が開きすぎるのも問題なので、陣営が出来るまではまだまだこの調子で続きます。

6、悩ましき未亡人（前書き）

必要だから書いたんですが、ごめんなさい。
相変わらず上手く纏めきれてないかも。

6、悩ましき未亡人

薄く白い靄の中
何かが私に流れて来る
抵抗しようにも
何も出来ずに
何かが私と混ざるのを
只々、感じるだけだった

／紫苑
「おかーさん！アレ見て！凄く大きい！」

璃々の指差す方向、洛陽の街の北側に、大きな丸い城壁みたいな物が見える。

『洛陽国立蹴球場』

「蹴球って確か…ご主人様の仰ってた球技のひとつに在ったわね。あんなに大きなところで遣るのかしら」
「さっかーって言うんだよ。球を蹴って相手の陣地に入れるの。学校でやったよ！」
「そうなの？お母さんは見た事ないから、どんな感じなのかしら？」

「手を使っちゃ駄目なんだよ。璃々は上手に出来なかったけど、上手な人は楽しそうにやってたから。もっと上手になりたいのに、

あんまり授業で遣らないの」

とちょっと悔しそうに、口を尖らせる璃々。

結構、負けず嫌いなのね。でも…あの甘えん坊がね～と苦笑する。そう言えば、いつの間にか腰に纏わり付かなくなった。子供の成長は本当に早いものね。いつまで子供でいてくれるのかしら。と、少し寂しさを感じてしまう。

三国連合成立から随分経った。ご主人様は今は洛陽にいらっしゃる。

――連合の象徴としてひとつの街に居を構え、三国とは別の意志で平和を模索しなさい。貴方の持つ天の知識を総動員してね。

との華琳様の言葉により、ここ洛陽に居を定めた。

当初、ご主人様は決戦の場となった赤壁に街を作り、居を構えようとしたが、周囲の反対により諦めた。

――一刀殿、その考え方は悪くはありません。しかし…。

――ちょっと、生々しいわよね～。そこで決戦があった以上、沢山の者達が命を散らしたのよ。その家族にとって…。

――はわわ、だからですね。赤壁には慰霊碑を置くことにしてですね？そうすれば、ご主人様の意志も散った兵隊さんの願いも…。

毎年、年の暮れに赤壁で慰霊祭が行われる。
その後、三国各国の都と洛陽で連合祭（仮名）が行われるが、そこは持ち回り制で、今年はこの洛陽で開催される。
各国の主だった者達は、直接赤壁に向かい、その後洛陽まで移動する事になる。

私が今、洛陽に来ているのは、璃々が来年春から洛陽の中学に通う為の入学式、入寮式がある為。
なんでこの時期に？とも思ったが、新入生は全員で慰霊祭に出席するのだそうだ。

「あっ！ご主人様だ！！」

考え事してる間に、いつの間にかに蹴球場の入り口まで来てたみたい。
そこでご主人様を見つけた璃々が、声を上げ、駆け出す。

「おっ！？璃々ちゃんお久し振り。大きくなったな～」
「うん！もう中学に行ける年になったんだよ」
「そうだったね。明日の入寮式と入学式が終わったら立派な中学生だ。晴れ姿見に行くからね。って言っても、俺も壇上で挨拶するんだよな～」
「やはり、まだそう言うのは苦手なのですか？ご主人様」

頭を抱えてうずくまるご主人様に声を掛ける。

「ああ、やっぱりいつになっても慣れないね。ミスして変なあだ名付けられたら立場がないしね。あの時みたいに…」
「確か…うわわご主人とか」

連合が成立した最初の式典の時に、あまりの緊張で顔を真っ赤にして「うわわ…」と固まってしまったご主人様。
思い出したらつい、笑いがこぼれてしまった。
そんな私に、

「笑うなんて酷いな〜…他にも、夕焼け少年とか、朝焼け御遣いとか…御旗じゃなく、三国の彫像とかも言われたなぁ」

そう言って「あはははは」と笑うご主人様が「うわわご主人さまだー」と笑いながら言う璃々を、ひょいと捕まえて肩車をする。

「おかーさん！どう？背が高くなったでしょ？」

と、嬉しいそうな璃々。
やっぱりまだ子供ね。と、少し安心したのは親馬鹿かしら。　それはそうと――。

「ご主人様。お久し振りです。お変わりなくて何よりです」
「ああ。紫苑も。相変わらずで何よりだ」
再会の挨拶をしたのでした。

「ご主人様、よろしいでしょうか？」
ご主人様の寝室の扉をノックして声をかける。
夜も大分更けたから、お休みじゃなければよろしいのだけど。
「紫苑？入っていいよ」

扉を開け「失礼しますね」と一言だけ言って、中に入る。

「ごめん。ちょっとだけその辺に座って待ってて。キリが良いところまで済ませるから」

見れば、椅子に座り机の上の書類を見ている。

私は黙って寝台まで歩き、腰を下ろす。ご主人様の邪魔にならない様な角度で、それでいてご主人様の顔が見える位置に。

お休みだなんて、失礼だったわね。三国の御旗として、連合の象徴。それに、この洛陽の統治者でもあるのに。

出会った頃は、皆と騒ぐのが好きな普通の少年。その為、良く仕事をさぼって愛紗ちゃんに怒られてたのを、皆で笑って見てたものだ。

力が強い訳でも、軍略に優れている訳でも無く、ただ、優しく穏やかな空間を作り出してくれた少年。

私はその中で過ごし、この人の作る世界を見たくて。この方の作る世界を、皆に知って貰いたくて戦っていた。

ご主人様を見る。真剣な目で書類を見て、筆を執り、書く。

それだけの事なのに、私の胸は熱く高鳴っていく。

今すぐにでも、そばに駆け寄り抱き締めたい。

「――んっ…ご主人様……」

我慢できず、分からないくらいの声量で声が漏れる。

どれくらい経ったのか。
ぼーっとする頭の中、自分を制御する事のみに神経を使っていた私の傍に、ご主人様が立っていた。
「紫苑、顔が赤いけど大丈夫か？声を掛けても返事が――」
私の顔を心配そうに覗き込むご主人様。何かを仰っている様だけど――。
我慢できず、ご主人様の顔を引き寄せ、熱く口付けをし、そのまま寝台へと引き刷り込んだ――。

薄暗い闇の世界を
私は流されていた
白く輝く一点の光に向かい
引っ張られていく
その流れに身を任せ

「おかーさん、朝だよー。早く起きてよー」
「璃々？…もう少しだけ寝かせて頂戴…ちょっと頭が痛いみたいなの」
微睡みの中、頭がガンガンし、ボーっとている。冬だと言うのに、あんな格好のまま眠ったからかしら…。昨日の事を思い出し、余計に顔が熱くなる。

「おかーさん、頭痛いの？お顔が真っ赤だよ？風邪ひいたの？」
「ううん、大丈夫よ。ちょっと飲み過ぎちゃったみたいなの。久し振りにご主人様とお話ししたから」

何とか誤魔化す。今日は入学式と入寮式だから、璃々には心配掛けたく無いものね。
でも、私はいつ部屋に戻って来たのかしら。それに、服もちゃんと着ている…し……？
ボーっとした頭で、何かおかしい事に気付いた。
ご主人様…？いや、確かに折角だからと、お召かしして行ったはず…。

「ねー、おかーさん？ご主人様って誰？」

璃々のそのひと言で、頭が覚醒し、ガバッと身を起こした。　そこには、小さな璃々が、あの頃の甘えん坊だった璃々が私を心配そうに、覗き込んでいた。

ボーっとした頭はどうやら風邪ではないみたい。少しずつ今の状況を理解していく。と言うより理解させられていく、と言った方がいいのかしら。

私の中に、もう一人の私が入って来た。その私の意識はどうやら未来から流れて来たらしい。
この先、黄巾の乱が起き群雄割拠へと突入。私はその志に打たれご主人様と桃香様を主君と仰ぐ。
別の記憶では、ご主人様は呉や魏に降り敵となっている。

それでも最後には連合が組まれ、ご主人様をご主人様と呼んでいる。

「訳が分からないわね。皆は何も思わないのかしら？」

いや、思わないのでしょうね。少なくとも私に入って来た私は、その記憶を普通に受け取った。当たり前の事。

それより何故私がこの状況に置かれたのか。考えた所で、やはり答えは出ない。

「一度桃香様に会ってみようかしら？このままだとおかしくなってしまいそうだわ。それに――」

呟き、窓から庭で遊んでいる璃々を眺める。

思えば璃々は成長の早い子だった。生まれて半年過ぎには歩けるようになり、一歳になる頃には普通に会話もできた。

たまに「けーきが食べたい」とか「ご主人様に早く会いたいな」とか呟いたり、初めて会う桔梗の好きな物を知っていたり、知らない不思議な歌を歌ったり…。

璃々はきっと産まれた時からあちらの璃々だったのでしょうね。

そう思うと少し寂しくなった。それに、主人…父親の事。

振り返って見れば、ご主人様と父親を重ねて戸惑っていたように思う。

甘えなかった訳では無い。むしろべったりだった。それでいて少し遠慮していた様な、不自然な感じがあった。

主人が亡くなった時も悲しみはしたが、すんなりと受け入れていた。

知っていたからなんでしょう。だから余計に、べったりと甘えていたんだなと思う。

涙が溢れてくる。
胸の中に大きな穴が空き、何かが音を立てて崩れていく。

「あなた…ごめんなさい…」

主人に謝る。
涙が溢れ止まらない。
いっその事、私のすべてを未来の私に奪われた方が楽になれたのに…。
昨夜の事が脳裏によぎる。
ご主人様を思うと、胸が高鳴り体が熱くなる。
私は会った事が無いというのに、身体が勝手に反応する。
私はまだ、主人を愛しているというのに、身体がご主人様を求めている。

璃々の為にも、私の為にも、ご主人様と桃香様に早く会わなければと決意した。

6、悩ましき未亡人（後書き）

このくらいの表現ならセーフですかね？
アウトだったり見苦しかったら教えてください。

7、董卓陣営遂に動く！か？（前書き）

遂にって、逆行初日と二日目。

7、董卓陣営遂に動く！か？

／恋

なんか、変。

「ここ……どこ？」

起きたら、知らない場所にいた。

良い匂い、しない。あったかくない。

ご主人様の気配……見つからない。

嫌な気配がいっぱい。

敵？…じゃない。

殺気が無い。それに…弱い。

音々は……いた。

「セキト…行こう」

どこか、見覚えのある道を歩いて、音々のところに行く。

／詠

「月！！月！！！」

そう叫びながら月の部屋の扉を勢い良く開ける。

寝台の上でうずくまる月を見つけ、駆け寄る。

「月！大丈夫！？ここが何処か分かる？」

震えている月の肩を掴んで、月の目を覗く。

――暗いわね。それにボクの事を見ていない。

月の視点は一点に固まっている。それでいて多分、何処も見ていないのだろう。

「月！月！！もう大丈夫だから！」

徐々にだけど、瞳を動かし始める月。ボクはその瞳をじっと見詰める。

暫くすると、月の目からは涙が滲んで、溢れた。

「え……い……ちゃ…ん？」

掠れた声でボクを呼ぶ月を、ボクはギュッと抱き締めた。

／霞

「音々のあの身体を返すのですー！！！」

城壁の上で音々が両手を天に突き上げて、叫んでおった。

「おー！？昔懐かしの、ちびっ子ちんきゅーやないか！？」

「な、なに奴！？」

ガバッと振り返る音々。結構こういうノリは良い奴なんや。

「なんだ、霞ですか。音々は今忙しいのであっちへ行くのです」

そう言うてまた天に両手を突き上げる。何がしたいんや？こいつは。

「音々の身体を返すのですー！！」

……諦めきれへんのやな。まー、無理もないか。

多分、ウチらは未来の夢を見ていたか、未来からココに移動して来たかのどちらかや。
と、なると…あの時の音々は物凄い勢いで成長してたからな。月や詠なんてあっと言う間に追い越して、恋と並ぶくらいになっとったしな。
おまけに、身体も出るとこは出て、引っ込むとこは引っ込む。と、いまの音々からは想像つかへん位になっとった。
まーそりゃ諦められんわな～。けど、今はそんなんに着き合うとる隙はないんやった。早くこの状況を確認せなあかん。
「月と詠の所へ行くで！今後の事を確認せなあかんやろ！アホな事しとるんやったら置いてくで！！」
そう言い捨てて、ウチは月の屋敷に向かった。

／詠
「――だからまずは、皆の記憶を確かめるから。その後の事はそれから考えるわ」
今、何とか落ち着きを取り戻した月と、記憶の確認を済ませたところ。
予想通り、未来から過去へと戻って来たみたい。
「詠、入るでー」
そう言いながら入って来たのは、霞・恋・音々・華雄の四人。今のボク達の仲間全員だ。

「丁度良かった。今呼びに行こうと思ってたところよ。先ずは皆、席に着いて」
そう言いながら皆を見回し、表情を読み取ろうとする。

霞は…多少の戸惑いはあるけどいつも通り。
恋……ごめん。わからないから後回し。
音々…見るからに不機嫌ね。それにしても、本当にコレがあんなになるなんて思わないわよね。不機嫌なのはそのせいかしら。
華雄…何も考えてないわね。

ひと通り表情を確認した後、話を始めた。
あまり意味のない確認だったけど。

「それじゃあ、皆はボク達と同じく、未来から来たと判断するわ。例えそれが夢だったとしても、それを全員が共有したならばそれは未来を共に歩いた事とそう変わりないから」
「すまない。それは、どういう事だ？」
「いい？ボク達は桃香様にも華琳にも他の誰にも、今の時点では会った事が無いわよね？」
「ああ。そうだな」
「でも、皆が同じ夢を見ていたとしたら、次に初めて会った時、夢の中の様に接するはずよ」

――だからそれは重要ではないのよ。と続け、先を話す。

話の内容はこう。
先ず一番重要な事、黄巾の乱が起きないだろうって事。
起きたとしても、華琳が真っ先に鎮圧に向かうだろうと。
あの覇王は、例え知り合いだろうと、世を乱す者には容赦しないわ。

次に、反董卓連合が組まれないだろう事。

あの時は、情報操作で一方的にやられたけれど皆が私達を知っている今なら、組まれる訳がない。例え組まれたとしても、桃香様は味方してくれるはず。傍観する者も出るだろう。

最後、これが有る意味一番重要だけど…一刀が記憶を持って降りてくるか、持たないで降りてくるか。これはその時になれば分かる事だから、その時に指示する事を伝える。

「霞、あなたは華琳の所に行って状況を調べて来て。華雄は白蓮の所。恋と音々は、ここで月を守って頂戴。狸共が何かしようとしたら、首をハネて構わないから」

皆に指示を出し最後に、ボクが汝南に向かうからと告げ会議は解散した。

会議が終わった後、ボクは急ぎ汝南を目指した。

「そんなに急がんでも」

と、霞に言われたがゆっくりしてはいられない。それは、霊帝存命中の今でしかボクらは動けないから。

今までと同じなら、霊帝は間もなく崩御する。

黄巾の乱のどさくさで上手く隠されていたが、ボクと月は張譲に教えられていた。

それまでに出来るだけの手を打つ。

あいつを動き易くする為に――。

汝南の街へは翌日の朝に着いた。着いて直ぐに美羽への面会を求め、謁見の間に通される。

今だけは、中央での肩書きが有り難く感じる。

「あら、詠じゃない？久し振りね」

「雪蓮に冥琳。相変わらず元気そうね。丁度良かったわ。後で貴女達にも会うつもりだったのよ。後で時間貰っていいかしら？」

挨拶もそこそこに伝えたい事だけを話す。今この瞬間に美羽が入って来て話が中断すると、後で雪蓮を探すのが手間になる。何せ、気紛れで神出鬼没だから。本当なら、今捕まえておきたいくらいだわ。

「別に、話があるなら何時でもいいわよ？」

「なんなら今からでも構わないがな」

そう言う二人に、やはり待ったを掛ける。

「ごめん。いまは美羽に確認したい事があるから。後にしてくれると助かるわ」

呉陣営の動きも把握したいが、今は美羽に会う方が先決。

「あら、残念ね～。冥琳、私達振られちゃったみたいだわ～」

残念がる雪蓮。だけど――。

「全然残念そうに見えないわね。むしろ楽しんでる様に見えるわ」
目が笑っていない。それに――。
「その殺気はどういうつもり？」
突如、ボクへ向けて殺気を放つ雪蓮。ふざけてるのかとも考えたけれど、直ぐにその考えは捨てる。
隣にいる冥琳が、変わらぬ表情のままボクを見てるから。
「ボクは今、ふざけてる暇は無いんだけど」
「別にふざけてなんかいないわよ？あなたにちょっと聞きたいことがあってね」
腰の剣に手を掛け、笑顔で近付いてくる。
「あなたは美羽を使って何をしたいのかしら？」
「別に何もしないわよ！確認したい事があると言ったでしょ！」
江東の虎の異名は伊達じゃない。本当に虎の檻に入れられたみたいじゃない。
「雪蓮、少しは抑えろ。董卓達を敵にしたい訳じゃないだろ？」
「あら、私はそれでもいいわよ？呂布に張遼なんて考えただけでも震えてくるわ」
もちろん嬉しくてね――。そう言ってニヤリと笑う孫策。
まるで狂犬だわ。
あっちでは、随分丸くなってた様ね。

「詠、ひとつ聞きたい。お前達は揚州を美羽に任せようと考えている訳では無いのだな」

冥琳――周瑜が口を挿む。

「ええ。最初はそれも考えたわ。けど、貴女達が黙っていないでしょ？」

「当然よ。私は大陸なんてどうでもいいけど、この母様が治めてた地だけは誰にも渡さないわよ」

「でしょうね。それならその方が助かるわ。けれど、あまり血を流さない様にして欲しいのよ」

周瑜と孫策が顔を合わせて頷く。

「わかった。なるべく血を流さない様努力する」

「これで同盟成立と考えていいわよね？あなたの目的も分かったし。中央の事には干渉しないから」

剣を納め、ボクに向かってそう言い放ち、部屋を出て行こうと歩き出す。

「あぁ、そうだった。美羽ならここにはいないわよ。一刀を探すんだって出て行ったから。それを言いに来たんだけど、忘れてたわ」

ごめんなさいね――と、笑いながら言い捨て部屋を出て行く孫策。

一人残されたボクは、今の遣り取りでの孫策を思い返す。

江東の虎なんて、そんな生温い物じゃない。

あれは…狂いに狂った虎だ。
本性を見せ付けられたボクはふぅっと息を吐く。
それにしても一刀も良く、あんなのを飼い慣らしたものね。恋より余程のバケモノだわよ。

それよりも、いつの間にかに決められた同盟。
確かに事を構える気は無かった。相手もそのつもりだという確約が取れたのは良いけれど――。

ギュッと拳を握る。
身体全体に力が入り、怒りで身体が震えてくる。
目的も達せられずにいい様にあしらわれた。
怒りも苛立ちも隠さず、ボクはありったけの声を張り上げて叫んだ。

「――何が！何が同盟成立よ！！まるで宣戦布告じゃないっ！！」

握られた拳からは血が滲み、指の隙間から流れ落ちた。

7、董卓陣営遂に動く！か？（後書き）

やっと出た詠ちゃん。

ぶっちゃけ、彼女と他数名は明確な目的をもっています。

感想の返事で書いたんですが、もとのサブタイトルが

『群雄割拠再び、乱世に渦巻く乙女の想い』

と言う物でした。

群雄割拠？起きます。

起こします。

じゃなきゃ話にならないので。

渦巻く想い？

何となく付けたんで良く分かんないですが（だからボツにしたんですが）渦巻きます。

いや、巻かせます。

というか恋姫多過ぎて既出組の出番が後回しになってますね。ほんと、すみません。

特に焔耶…勢いだけで幽州行きにしてしまったが、立ち位置が原作の華雄にならないか心配な今日この頃です。

読んで頂き、ありがとうございます。

6、旅の三人娘（前書き）

星・風・稟の三人です。

短いですが。

6、旅の三人娘

／稟

「お兄さ～ん？どこですかー？」

先程から風が一刀殿を探しています。

それはそれで理解できるのですが…何故にごみ箱の蓋を開けているのでしょうか。

「稟ちゃん稟ちゃん。こんなのがいましたが、これはお兄さんでしょうか？」

呼ばれたので振り返ってみれば――。

「いやはや。確かに主は気が多くて手も早かった。しかし、それに付いてるのは足ではあるまいか？」

「でも、お兄さんは逃げ足も速かったのですよー」

「確かにな。あの怒った愛紗の足に逃げて勝てたのは主ぐらいのものだ」

百足を掴んでわいわいやっている風と星。

「本当にそれが一刀殿でもよろしいのですか？お二人とも」

呆れながら、二人にそう言う。

「ん～、稟ちゃんのお眼鏡には叶いませんでしたねー」

そう言ってポイッと百足を捨てる風。

「女性に捨てられるなんて、やっぱりお兄さんじゃなかったみたいです。元気に生きるのですよ？一刀三号」

しゃがんで百足に話しかける風。

「うむ。しかし、捨てられてもめげずに、言い寄って来る辺りは主にそっくりですぞ」

見れば、一刀三号もとい、百足が風の足を登ろうとしている。慌てた風が、よよよと体勢を崩したところ。

呆れ果てて何も言えませんでした。

「一刀三号が潰れてしまいましたー！！」

「女の尻に敷かれての圧死とは、主の未来を暗示している様で笑えんな」

そう言いながら「くくく」と笑う二人を見て、この先も一緒に旅をして行きたかった。と思ってしまいました。

――風はですね、お兄さんはちゃんと記憶を持って降りて来るような気がするのですよ。

こちらに来てすぐの話し合いで風が言った言葉。

何故そう思うのですか？と、聞いてみれば――。

――お兄さんは、風達を泣かせる様な事はしないのですよ。

と。更に続けて、

――だから、風はお兄さんを悲しませる事はしたくないのです。

――それは何なのですか？

聞いた私を一度見てから、天を見上げて言ったのです。

――風はもう、誰も死なせたくありません。だから――

言葉を切り、私と星を見てからニッコリ笑って、

――だから風は、鬼になるのですよ。

その言葉を聞き、一体何を言っているのだろう？と首を傾げる我々に、風は続けて言いました。

――だから、風は華琳様の所へは行かないのですよ。三人旅はこの街で終わりなのです。稟ちゃんも星ちゃんも、今までありがとう…なのですよ。

そう言って頭を下げた風。

突然の事で、私も星も何も言えませんでした。

鬼になるとはどういう事なのか、今でも理解できません。

いや、言葉のままなら理解できますが、あの風が鬼になるという事の想像が付かないのです。

それに、この旅がこの街で終わりだなんて……。

私は風に聞きたい。

――鬼とは何ですか？と。

――それは必要な事なのですか？と。

――それは風が成らないといけないのですか？と。

――それで皆が笑っていられるのですか？と。

――風は幸せになれるのですか？と。

――一刀殿が悲しまずに済むのですか？と。

――風の隣に私はいてはいけないのですか？と。

風のあの笑顔を思い出すと、聞くのが怖くなるのです。
ずっと二人で旅をして、華琳様の下で過ごしたと言うのに――。

風、知っていましたか？

私は、隣に貴女がいないと、空回りばかりしてすぐに倒れてしまうのですよ。

私は、貴女が隣にいるから、安心して全力を尽くす事ができるのですよ。

私は、親友の心の内を聞く事も出来ない程の臆病者なのですよ――。

「ぷっ…ぷわっはっはぁっ！…くくくっくっ…っ！」

何を馬鹿な事を考えているのですかね、私は。思わず思い切り笑ってしまいましたよ。

「おぉ！？稟ちゃんが新しい性癖に目覚めましたよ、一刀七号」

「しかし稟の奴、常に思いも付かぬところから攻めてくるな」

「軍師の鑑ですよ、稟ちゃんは」

ほんと、この二人は次から次と…。これが一刀殿の言っていた『混ぜるな危険』というやつですね。

「二人とも、これから先どうしますか？」

「風は洛陽に行ってみますねー」

「そうか。ならば私も洛陽とやらに行ってみるとするかな」

「奇遇ですね。私も洛陽に用事があったのです」

聞くのが怖いのなら、話してくれるまで一緒にいればいい。　それに、私には風が必要なのです。風がなんて言おうと離れる必要はないんですよ。

華琳様には申し訳ありませんが、私は風について行きます。

目を開いて私を見る風。
目を細めてそんな風を見つめる星。
そんな星が私の方を向いて、ニヤリとしたのでした――。

星殿…そこは普通、ニコッとする場面ではないのでしょうか――。

6、旅の三人娘（後書き）

見出チームあと二つ。
いや、一刀もいたな～。

ん～、ＰＣ壊れてるため口調やら性格が把握できてない人物が後回しになってます。

今までもそうですがこの先、おかしな所があったら教えて貰えると助かります。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9281x/

真・恋姫†萌将伝 〜群雄割拠再び？〜

2011年11月4日14時03分発行